

STAGE 3 文学的文章Ⅱ

2	(ア) 3	(イ) 2	(ウ) 2	(エ) 3	(オ) 1	(カ) 4
(キ)	2					

解答(P 14～30)

解説

- 2 (ア) 「舌打ちをする」というのは、不満な気持ちを表す行為である。ここでは、「ぼく」のせいで先生にしかれたことに対する不満を表していると思われる。
- (イ) 傍線部の直前にある先生の言葉に対する返事ではないことをおさえる。「ぼく」は、伊藤友子をクラス委員に選んではいけないことに納得できていないのである。名前を記入することに対する不満ではなく、ふざけた投票として、再び投票しなければならないと考えることに對して不満を持っているのである。
- (ウ) 傍線部の直後に「信じらんない」とあることから、投票した意図がすぐにはつかめず、驚きの声になって表れたものと考えられる。
- (エ) 1の「鼻にかける」は、自慢するときに使う。2の「目をほそめる」は、満足したときの表情である。3の「唇をゆがめる」は、嫌なことや納得できないことに苦い思いをもつときに使う。4の「頬をゆるめる」は、笑顔になるときに使う。ここでは、先生に逆らう「ぼく」の思いを表す言葉が入る。
- (オ) 漢字では「伊達に」と書く。「伊達」は、ふつう「見栄をはるさま」をいうが、ここでは「これといったことを何もしないで」の意味で使っている。

STAGE 5 説明的文章(社会科学)

2	(ア) (2)	(イ) 1	(ウ) 3	(エ) 3	(オ) (日本では) 絶対的平等感が強く、能力による待遇の違いにも反対するので、創造的な個人の活躍する場が奪われる(こともあるという点。)(46字)
(カ)	1	(キ) 4			

解答(P 41～50)

解説

- 2 (ア) 脱文挿入については、そのあとの指示語が何を指しているかを おさえるようにすればよい。(1)の「このように」は、[3]段落の内容を受けている。したがって、ここには別の内容は入らない。
- (2)は「そのような誤答」が何を指すかを考える。すると、「誤答」に対する記述が、この前にはないことがわかる。脱文の中に、「間違ってみること」とあり、この内容を指していることがわかる。(3)のあとの「その点」は、「生徒の個性的な生き方を阻害することになる」ことを指している。したがって、ここにも入らない。(4)のあとには指示語がないが、脱文の「問題を解く」という内容とは、関係のない話題になっているため、ここにも入らない。
- (イ) 「ユニーク」には、「独特の」という意味があるが、ここでは、すぐ前の「個性的」を言いかえた言葉であると気づけばわかりやすい。
- (ウ) 傍線部と同じ段落に「個人の確立がすぐに個性の発展に結びつくとも言えない」とある。すなわち、「自分の意見をはっきりと主張」したからといって、それで「個性的」であるとは言えないと述べているのである。
- (エ) 「自然科学」は、西洋近代化の中で発達してきたものだから、日本人が、その自然科学で創造性を開花させるのは無理だというつながりの文であることを確認する。
- (オ) 「大いに反省しなくてはならない点」ということから、けつし

- (カ) 傍線部の直前に「ここで引き下がるのは恥だ」とある。ここから「格好の良い男」とは、簡単には引き下がらない男だと「ぼく」が考えていたことがわかる。
- (キ) 傍線部の直前に「この時、初めて」とあるので、このときの先生の態度に對して「見下すことを覚えた」と考える。したがって、「ぼく」の質問に對してきちんと答えずに、ごまかそうとする態度に對し、「ぼく」は不満を持ち、大人というものを見下すようになったとわかる。

- (カ) 「ジレンマ」は板ばさみに悩むことだが、ここでは、従来の方法ではいけないが、そうかと言ってこれから西洋に追いついて近代自我を確立しようとしても、その間に近代自我そのものが時代遅れになってしまい、両者ともに行き詰ってしまう。つまり、これまでとは違う新たなあり方が求められていることに悩んでいるのである。
- (キ) [4]段落に「このように考えてくると」とあり、その前の内容をふまえてまとめている内容であることを示しているため、ここで分かれると判断できる。また、[6]段落に「話を……個性の問題に戻すことにしよう」とあるので、[3]段落までの内容に戻される。したがって、ここでも分かれる。そして、日本での問題点をまとめた[8]・[9]段落がまとめとなっている。

STAGE 7

論述の資料読み取り問題

解答(P 58～65)

- ③ (ア) (例) その中でも、十六から十九歳は、二十五パーセントという顕著な増加率を示しています。(40字)
- (イ) (例) 言葉づかいに対する若い世代の意識は確実に高まっております、全体として、正しい言葉づかいや美しい言葉づかいを心がけようとする意識が、特に強まっていると考えられます。(79字)

解説

- ③ (ア) 〃の直前に「十代から三十代の若い世代は、いずれも十パーセント以上の増加率を示しており」とあるのに注意する。平成十六年から平成二十三年の、十代から三十代の割合を見ていくと、十六から十九歳は25%、二十代は10%、三十代は13%増加していることがわかる。これをふまえた上で、さらに、指定語である「顕著」を使って述べるべき内容がどのようなものかを考えなければならぬ。十代から三十代の中でも増加率が「顕著」なのは、十六から十九歳であるとわかるので、十六から十九歳が、25%という顕著な増加率を示していることを書く。

(イ) Bさんの発表のまとめである「(若い世代の)言葉づかいに対する意識は確実に高まっている」という部分と、Cさんの発表のまとめである「全体として、正しい言葉づかいや美しい言葉づかいを心がけようとする意識が、特に強まっている」という内容とを、うまくつなぎ合わせて書く。

STAGE 8

古文読解 I

解答(P 66～69)

- ④ (ア) 4 (イ) 2 (ウ) 3 (エ) 1

解説

- ④ (ア) 「頭をかたむけ」は、疑問に思っ頭を傾ける様子である。「首をかしげる」と同じ。なお、「耳をかたむけ」であれば、真剣に聞くという意味になる。
- (イ) 「おぼし違へ」は、「思い違い」のことである。ここでは、「堪忍の二字」というのを、「かんにん」は四字である、と言っている。
- (ウ) 「論ず」は現代語でも使う「説得する」の意味である。あまりにも愚かすぎて、理解させるのは難しい、と言っている。
- (エ) 「堪忍」の大切さを説く人が、「人に似て虫同様なり。おのれがままにすべし」と大いに憤ったのに対し、それを聞いた文盲なる人は、「悪口を言われても少しも腹立たない」と笑っているところが、この話のおもしろいところである。

【口語訳】

ある人が文盲(字の読めない人)を意見して、「世の中の交わりにはほかのことはない。ただ堪忍の二字をよく守りなさい。」と言ったところ、文盲の人は首をかしげて、「かんにんとは四字でございませんか。」と指を折って数え、「あなた様は思い違いをなさっているのでしょうか。かんにんと四字でございますよ。」と言うと、意見をした人が言った。「愚昧(愚かで、ものの道理がわからないこと)の人だな。堪忍とは『たえしのぶ』と読んで二字である。」と言えば、また首をかしげて、『たえしのぶ』ならば、また一字増えている。五字となりますでしょう。なんとおっしゃっても、私たちは四字と思えますので、四字で堪忍して(許して)いただきます。」と言ったところ、その人がまた言うに、「お前のような愚かな文盲には本当に教えることができないよ。人に似ているが虫と同様である。おまえの思

うままにしろ。」と、たいそう腹を立てたので、文盲の人は笑って、「なんとでもおっしゃってくださいよ。私たちは『かんにん』の四字を知っておりますので、悪口を言われても少しも腹は立ちません。」と言って、笑っていたそうだ。